

野上彌生子が描く大正期の新家庭と「主婦」 －女中物語「小指」と「渦」を中心として－

李姪垠*
lovelyje@hanmail.net

目次

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 3.2 社会問題化する女中払底と新中間層の登場 |
| 2. 女中物語「小指」と「渦」 | 4. 終りに |
| 3. 婦人雑誌にみられる大正期の新家庭と新中間層 | |
| 3.1 女中と主家の関係における近代化 | |

主題語: 女中物語(jochumonogatari)、小指(koyubi)、渦(uzu)、新中間層(New Middle Class)、大正期(Taisho era)

1. はじめに

弥生子の明治期から大正期にかけて書かれた短篇の作品のうち、自分の使っていた女中¹⁾を題材にした作品がいくつかある。「お由」(『婦女界』第5巻第1号、1912年1月)と、「小指」(『中央公論』第30年第11号、1915年10月、最初「二頭の小馬」と題して掲載)、「渦」(『太陽』第22巻11号、1916年9月1日)がそれである。

これらの作品は、弥生子の初期の作品と同じように一般にあまり知られていない作品であるが、その時代を生きた主婦の姿が女中を眺める視線を通して克明に描かれており、当時の中流家庭の主婦としての弥生子の生活感覚や考え方を知る上で重要な意味を持つ作品であると考えられる。一人の主婦として、母として感じざるを得ない理性と感情の対立、現実と理想の衝突、ややもするとエゴイスティックに傾いてしまう人間の本性への鋭い観察と分析が行なわれており、弥生子の理知的な性情がうまく表現されていて興味深い。

女中を主人公とした最初の作品である「お由」は、使い慣れていた女中であるお由の縁談

* 東國大學校 日語日文學科 講師

1) 「女中」という言葉は今日では差別語としてされているが、歴史的な意味を持つ言葉として、このまま使用することをあらかじめ断っておきたい。

が決り、女主人である友子の配慮と愛情のもとで主人の家を立つまでの過程が描かれる短篇である。女中の心理に立ち入った描写よりは、お由の不幸な家庭環境や年頃の女中を使う若主婦の心境、主婦としての経験の乏しい若い母親にとって頼もしい女中に頼るしかない姿が詳細に描かれており、家庭内の女中の役割が強調されている。

「お由」を初めとする一連の女中物語に対して谷川徹三は、自分の家に召し使っていた少女の思春期の異常な心理を描いたものとして、それを終始外側から描きながら、温かい同情による心の交流によって一個独自の心理小説としていると評価している。²⁾また瀬沼茂樹も、女性の生理や心理を精緻に観察して、むずかしい思春期の動揺する精神を追求していると述べており、二人は肯定的な立場から思春期の動揺する少女の心をうまい観察力によって描かれているところを指摘して解説を行なっている。

しかし「一家の主婦に取つては、使ひ慣れた善良な召使ひは、十分訓練された兵士のやうなもので、それが突然違つた新しい他人と入れ替ると云ふのは、一家の仕事の上にも又は感情の上にも、決して好ましい事ではない」という「お由」の中の文章に示されている弥生子の女中への意識構造についての問題提起もある。助川徳是は、使用人にとって女中は訓練された兵士に過ぎず、使用人が示す「寛大と親切」は友子の真情ではなく、「訓練された兵士」に召使いを仕立てるための政略であつて、作者の意識は明らかに前近代적であるという批判を行なっている。そのような批判は、「当事者の痛みというものへの想像力が欠落」しており、弥生子が下層社会の人々を作中に描くのは、「珍奇な生活への好奇心」からのもので、「何ら自分に関わりあるものではない」という結論まで出している。³⁾

さらに坂本育雄は、弥生子の描く女中ものに対して、女中の内面への立ち入った解剖がなされていないから、作者はこの女中のとった奇怪な言動の真の意味を理解できないとし、それは小市民的な、閉鎖的なエゴイスティックな生活感情から作者が抜け出す努力をしていないことに由来していると作者の意識自体を問題にしている。⁴⁾また、逆井尚子は使用人の危機に対する同情から、彼等の苦情を観察したものであるといつても、その同情が、かえって主人公自身の特権的立場を助長しうる作品構造をつくりあげているのではないかという疑問を提示している。⁵⁾

以上のような先行研究からも分るように、この作品に対する評価は大体二つに分かれて

2) 谷川徹三(1955)『野上弥生子』『現代日本文学全集』28、筑摩書房、pp.69-90

3) 助川徳是(1976)『野上弥生子の初期作品』『名古屋大学教養部人文社会科学紀要』20、pp.21-35

4) 坂本育雄(1969)『野上弥生子ノート』『日本文学』18(5)、pp.38-52

5) 逆井尚子(1992)『淋しい河のほとりの野の人』『野上弥生子』未来社、pp.31-40

いる。一つは、思春期の少女への同情がベースとなって弥生子特有の緻密な観察力への肯定的な評価であり、もう一つは、女主人の女中に対する態度における無神経さ、前近代的な姿勢、特権的な立場の表れなどへの批判的な評価である。

しかし、そのような批判は、作品の一断面だけを捉えたための判断であり、あまりその時代、大正期という同時代的な状況や時代背景を考慮しない、やや不注意な分析から出されたものではないだろうか。また、冒頭でも述べたように、この作品への十分な分析による批判であるよりは、作品の表面に連なっている言葉だけに集中したために、そこに秘められている弥生子の特徴的な描き方と真の意図を見逃したように思われる。「お由」から「小指」、「渦」に至る女中物語の全体の総合的な分析を通して、作中の人物造形の特徴と作者の意図を明らかにする必要がある。現実という枠の中で理性と感情のぶつかり合いと女主人としての微妙な心理状態が、緻密な観察力によってどのように描き出されているのであろうか。弥生子が描く人物造形の特徴と彼女が持っていた問題意識がどのようなものであったかを明らかにしたい。

ただ「お由」はまだ写生文風の作風から完全に脱皮していないため、起承転結の構成が整えられ、ストーリー性を持つようになる「小指」と「渦」を主な考察の対象として分析を行いたい。

2. 女中物語「小指」と「渦」

「小指」は右手の小指が僅かに短いことを苦にして投身自殺を企て、未遂に終わったきみという女中と、作者及びその家族とのつながりを詳細に描いたものである。或る日の晩、出かけて行った女中のきみが夜遅くまで帰って来ないのを心配し、なかなか寝付かない女主人の曾代子の様子から作品が始まる。最近或る神経系統の病気で六つの兄と三つの下の兄の世話とほとんどの家事をきみに任せている状態である。しかし十六の小娘から五年間同じ屋根の下に住んでいるきみは、善良で誠実でありながら、やや鈍く、情義に厚い代わりに理智に乏しい性格を裏づけて一種の深い憂鬱があることに気付いている。きみの憂鬱性が大した原因のない遺伝的なものとして考えていたが、この一二年その傾向がだんだん著しくなり、彼女の病的な性癖や非常識的な行動は新たな注意を呼ばないではおかぬ程になっている。きみは特に自分の左の小指が短いことを頻りに苦に病んでいた。そのように

年と共に進んできた不幸な傾向について曾代子は、生理的な原因が大分加わっていると感じていた。その頃の年齢と肉体に密接な交渉を持った性的憧憬、または性的空想というような柔かい情緒を無意識に生じながら、自由にその中に投げ得ない懊悩、不満、羞恥などの複雑な感情が彼女の憂鬱を深からしめていったと思うのである。一晚が過ぎ、きみは昨夜池に身を投げたのを救われたということを聞かされる。きみは自殺するつもりで、二人の兄弟に死形見として二頭の小馬と主人への書置も残していた。曾代子はきみの憂鬱な性情が子供たちに悪影響を及ぼすことを心配しながらも、青春の時代の一つの転機を昨夜危うく飛び越えた彼女のことを可哀想に思い、以前と同様に女中として受け入れる。自殺の動機を聞く曾代子に、短い小指のためであると答えるきみの姿で物語が終る。

「小指」を読んで一番目に付くところは、やはり女主人の女中きみに対する、深い愛情に基づいた細心な観察力である。次の引用文は、曾代子の目を通して描かれるきみの性情ときみの微妙な心的変化への描写のところである。

五年間同じ屋根の下に住んで、彼女の性情、ことに十六の小娘からだんだん一人前の女に進み熟して行った身体や心理に就いて自ら観察者の地位に立たされた曾代子には、きみの表面の平静や無事を見て安心してばかりはみられない或物を感じてみました。(中略自分の最も近くに生き、成長しつつある唯一の女性として、主人とか召使とかの階級の念なしに、その若い娘の事が親身に気にかゝりました。而して時々感情の変化や、振舞に細かく目を留めてみてみると、年と共に進んで来たそんな不幸な傾向には、生理的原因が大分加わってゐるのが感じられました。〔「小指」の366頁-367頁〕

きみの憂鬱な性情に対する分析が詳しくなされており、主人と女中という上下関係より、同じ女性として、またはまだ思春期の渦巻きのような時間の中で成長し続けている少女をまるで妹を見るような目線で描かれている。またきみの異常な行動の原因への推測が、きみに直接確認されたものではなく、曾代子の自分かつての推測にすぎないにも関わらず、きみに女中以上の一人の人間としての関心がなくてはできないほどの愛情が示されているのは明らかであると思われる。

しかし、ここで注目すべきところは、女主人である曾代子の微妙な心境の変化に対する緻密な描写から表れる女主人としての二面性である。きみの普段の精神的不安と現在の行方に対する心配をしながらも、きみの不安定な精神が子供たちに及ぼす悪影響を気にした

6) 『野上弥生子全集』第2巻(1980年8月7日)、岩波書店

り、きみの不在によって通常の生活が乱されてしまうかもしれないことへの苛立ちが、曾代子の中で衝突しているのである。

きみは女中と云ふよりは寧ろ乳母であり、保母であつたのですから、本当に無事に帰つて呉れなくては困ると思ひました。併しこの瞬間の曾代子の心持にはきみに対する他人気を離れた愛が十分あると共に、利益勘定から来た自分勝手な考へ方―決して邪まな意味はないとは云つても―の交つてゐた事も拒むわけには行きませんでした。(中略)親子四人の小さな家庭生活の中に、似合はしい一員と化さして了はうとするには人一倍苦しまなければならないのであります。(中略)曾代子がきみを失ふ事を惜んだ利己的な考へ方と云ふのも、結局その安定を乱されまいとする願に外ならないのでした。(「小指」378頁)

曾代子が純粋な愛情に基づいてきみの無事を願っているながらも、きみの異常な傾向が及ぼす影響への恐れと、日常生活の乱れによる不便を考えるなど、自分の家庭のことをまず重視する様子が描かれる。これはまさに先行研究の坂本が言及した、小市民的、閉鎖的エゴイスティックな生活感情があらわになっている文章である。しかし、これらの曾代子の感情、考え方はたしてまちがっているとして批判されるべきものであろうか。エゴイズムとはいっても曾代子の感情はごく普通の家庭の主婦であれば十分考えざるを得ない問題であり率直な心持であるだろう。次の文章もきみに対する曾代子の複雑な感情と気持の変化が描き出される代表的なところである。

この瞬間は慥かにきみに対して昨夜のやうな暖かい思ひやりを持つ事は出来なくなつてゐました。寧ろ彼女を怒り立たしくさへ思ひました。(中略)殊に曾代子は一瞬間まで自分の利己的な筋の立たぬ腹立を悔い恥ぢる心持になつて耳傾けました。(「小指」376頁)

戻つてこない女中を腹立たしく思う女主人の姿は当時の家庭主婦としては率直な生活感情のあらわれであると思われる。いくら主人側が女中に愛情を持っているとしても、両者がお互いを完全に理解することはもともと不可能である。それぞれの立場というものがある、女中がいなくなって生活がめちゃくちゃになつても女中の安否だけを心配する女主人の姿はむしろ非現実的である。人間の中には他人を思う同情心と自分のことを優先して考えようとするエゴイスティックな感情がつねに共存している。作中で描かれる曾代子の姿は或る意味でごく人間的で、現実的なものであるといえる。注目すべきなのは、そのような女主人のエゴイスティックな気持を作者はむしろ躊躇することなくありのままを描

いているのである。また「利益勘定から来た自分勝手な考え方」「利己的な考え方」という文章が作中で直接語られることから、作者がそのような二面的な人間の感情を意図的に描き出そうとしたといえる。それは、理性と感情の対立、エゴイズムと同情心の衝突でいつも悩み続ける人間の内面を克明に描こうとした作者の意図が反映されたものなのである。

それでは、「小指」が発表された11ヶ月後の1916年9月1日に発表された「渦」はどのような作品であるのか。

6、7年間使っていた女中きみが縁談のために暇を取りたいということを女主人である曾代子に伝える。使い慣れた女中への未練と、結婚費用などの経済的な負担を心配しながらもきみの結婚の準備を進める。しかし、普段とは違うきみの異様な行動をキャッチした曾代子は、その原因が1、2年前に自殺未遂を起したきみの傾向が再発したためであることが分る。ややもすると精神的動揺と懊悩が自殺行動へ走らせてしまうきみの不安定な心理への根本的な対処法として、「異常に統一された精神的能力」を持つK夫人の力を借りてみることを決心する。きみは曾代子の友人である松井馨子の紹介でK夫人のところに訪ねる。「不思議な神秘力を体現した」といわれるK夫人の力を信じることは出来ないが、自分の悲しみや悩乱から脱するためにK夫人に頼ってみようと心を決める。K夫人のところへ通ってから一週間たった或る日、きみが曾代子に自分の盗癖を白状する。曾代子はその原因を異性への憧憬と幻影、現在の仕事、生活への不満と嘆からきたものであると推量し、そのきみに可憐さと憐れみを感じる。神への信仰はきみを落ち着けていったが、K夫人のところのS君との出会いがきみにより激しい心的動揺と惑乱を起す引金となる。その「秘密な悩み」を曾代子に打ち明けたきみは、K夫人のところを通うことをやめ、彼女の頭を真っ黒に包んだ一時の憂鬱から脱し平常に戻っていった。

作品の概要からも分るように、「渦」は先に発表された「小指」と登場人物や、ストーリーのつながりなどの点においてかなりの共通性をみせている。「渦」における曾代子ときみはどのような人物として描かれるであろうか。

使い慣れた女中が縁談のために暇をとりたいという申し出に対して、その結婚にかかる費用と、女中が代わることによる生活上の不便をまず考えてしまう「打算的な利害観念」を表す。

その謙譲らしい言葉とは反対に、稍打算的な利害観念でありました。「四五十円の余分な金をまた彼女のために使はなければなるまい。」併し、約束した祝い物を、上方見物で帳消しにしようとする程露骨な心にもなり得なかったので、「他の事ぢやなし、ぢや代りの見つかるまでめて、

見つかり次第に下る事にして下さいよ。」曾代子は、心ではどう思つたにせよ、矢張り斯う云ふより外はなかつたのでした。(「渦」7227頁)

一方、きみの心的な動揺と不安を察知する鋭敏な観察力を発揮し、自殺行動を止めるために信仰を持たせるなどの努力をするなど、思いやりのあるやさしい女主人としての面も持っている。

曾代子は若い彼女の不幸な心の動揺を憐み同情すると共に、半月の間異常な発作を目撃しながら、それから何が来るべきかを見抜き得なかつた自分の迂闊を悔いました。(中略)本当にきみを救はうとするには、一時的の教訓でなしに、もつと根本的な方法を取つてやたなければならぬと思ひます。(中略)「水に落ちかけてゐる子供を見て、通りかゝりの人が知らぬ顔をしてゐられないのと同じやうに、お前の不幸な決心を知つた以上、私は黙つてみてはゐられないのです。もう何んにも云はなくともいゝ。その代りただお前の捨てようとした命を私が預かりますよ。いゝだらうね。その間お前の命は私のものだからお前の自由に捨てたりしてはならないのですよ。ね、その約束が守れて?」(「渦」238頁)

他人へのやさしさと冷静さを併せ持ち、感情的でもあれば理性による自己節制も怠らない女性像は弥生子の作品によく描かれる性格である。感情的になりやすい状況の中で自己をコントロールし理性的に行動しようと心掛ける女主人の姿は「小さい兄弟」の母にも、「小指」の曾代子にも見られる様子であつた。自分の家庭を優先するエゴイスティックな面も持っていれば、他人への配慮と同情心も忘れない女主人の二面的な姿はいかにも人間的で現実的であり、「小指」の曾代子と完全に一致する人物造形である。

それでは、女中であるきみはどのように描かれているのであろうか。杉山家で六、七年間女中として働いているきみは本来「醇朴で善良な気質」で勤勉であるが、「幾分か異様な惑乱と懊悩」を隠し持っており、一、二年来態度の変化と鬱積した様子をみせている。自分自身について「みじめな罪人」であるという自己卑下が激しく、きみの心は家族との乖離と他人に対する劣等感などが原因で「対象のぼんやりとした恨、怒、歎、羨やみ」で一杯である。自分の盜癖を女主人に自ら白状する心弱さや素直さ、S君への片思いなどの異性への感情をあまりに過剰に考えてしまう彼女の純真さは女主人である曾代子の同情を引く。また、自殺未遂の前歴を持つきみが、自殺への衝動を起す理由について自分の小指のせいにしていたというのはまさに「小指」のきみと同様である。作者が「小指」のきみと同一人物と

7) 『野上彌生子全集』第三卷(1908年10月6日)、岩波書店

して「渦」のきみを設定したことが推測されるのである。ところが、注目すべきところは、「小指」の中で描き出されたきみが、主に曾代子の立場からの描写しかなされておらず、きみの心理状態への分析が皮相的な段階にとどまっていたのに対して、「渦」においては、きみ本人の声が作中に直接的に登場し語るようになるのである。

自分の事などを心配して呉れるものは一人もなさうに感じられました。きみは情けなくなりました。家どうの者が憎くさへなりました。取り分け人の好い兄に甘え媚びて、我儘一杯に振舞つてゐる嫂と、自分は半途でよした小学校を、完全に六年まですました上、今はお裁縫まで習はして貰つてゐる妹、それもずっと自分より器量よしの妹の事を考へると、彼女の胸は妬ましきで一ぱいになりました。(「渦」243頁~244頁)

当てどもない異性に対する憧憬、変化のない仕事と子供相手の平凡な生活に対する無意識の不满、未来の運命をあるべき以上に無価値に考へる感傷的な歎一袋の中の苦しい存在物であるこれ等のものは、蛇の如く噛み合ひ、纏れ合つて、消極的に内に凝結する時、死を決する程の絶望となり、積極的に外に向つて膨れる時、激しい憎悪、嫉妬となりました。彼女は自分よりすぐれたもの、美しいもの、幸福なもの、多望なもの—自分以上のあらゆるものを羨み、嫉み猜みました。彼女は時としては自分の一番信頼してゐる女主人をさへ其の対象にした程でありました。(「渦」257頁)

「小指」ではきみの不安定な心理状態への原因分析が断片的で抽象的であつたが、最後の文章をみると、きみの懊悩の実体への分析がかなり具体的で詳しくなされていることが分る。家族の中でも疎外感を感じ、特に学歴や美に対する自信を失ったきみの自分自身への不満は、妹や嫂を始めとする周りの人たちへの激しい劣等感と深刻な自己卑下まで進行する。さらに年頃の女性としての異性への憧れはそのような彼女の心理状態をより不安定なものにさせてしまうのである。人並みより二分ほど短いきみの小指は、人並みの生活ができない彼女の不満と劣等感の象徴なのである。

馨子への手紙において、自殺行動の原因をきみの云う小指のためであるという言葉が曾代子は信じないと書いているが、しかしながら作品の全般においてきみの不安定な精神状態と懊悩の原因についての鋭い観察力による分析が詳しくなされている。このようなきみの心理に対する手の込んだ分析がこの作品の要のところであり、作品の意図でもあるのである。

それでは、弥生子はなぜ前作の「小指」につづき「渦」を書こうとしたのか。弥生子の描く女中ものに対して、女中の内面への立ち入った解剖がなされていないという坂本育雄の批

判を弥生子も「小指」を発表するにあたって作品の問題点として認識していたのであろうか。

先も述べたように、前作である「小指」では主に女主人の眼から見たきみの姿が描かれ、きみの心に立ち入った描写はあまりなされていない。「小指」のきみの精神的な異様と変化についての鋭利な観察は行われるものの、その原因については皮相的な理解と推測しかなされていない。きみの失踪による女主人の心的な動揺と主婦としてのエゴイスティックな立場、杉山家におけるきみの役割の重要さと兄弟ときみの深い関係への描写などがおもに描かれている。きみの自殺行動とその原因についての深い理解が示されておらず、次の文章のように彼女の自殺未遂事件を一つのハプニングとして受け取ろうとする女主人の態度が目立つ。

それは読んで暗い痛ましさを感じさせる代わりに、可愛げに、且ついくらか滑稽に思はれらやうな微笑を二人に与へました。書置の当人が死なずにすんだ安心がある上に、その書き方や、又投身の場所の選び方などが新聞の三面記事からでも学んだらしく、すべて紋切形と云ふ風な形式に嵌り過ぎてゐたからであります。(中略)「……それを書いたり考へたりする事が興味でもあり愉快でもあつたのだらうから、これで自分で拵へてゐたロマンスを現実にしよとしたんだらう。」(中略)単純な同情のみからではなく、寧ろメロドラマでも見るやうな興味の勝つた心で。又可なり冷酷な批評眼を働かせて。(「小指」397頁)

最後の引用文は「小指」の終わりの部分であるが、ここで示されているように、曾代子はきみの自殺行動についての十分な理解がされていないように思われる。きみの心への深入りがなされず、きみとの心的な交流がなく、曾代子の一方的な推測と解釈によってきみへの描写がなされる。きみの心理への描写より二人の兄弟との関係描写に力が注がれ、初出では二頭の馬の話で話を締め括っていたのもそのような作品の意図からのものであったであろう。⁸⁾ 作品を読む側としてもきみの自殺動機があまり詳しく描かれていないため、本文における「性的憧憬」に自由に投じ得ない「懊悩、不満、羞恥、他を羨むの情と、絶望的の諦め」という説明だけではきみの精神的な動揺への感情移入がなされ難く、後味

8) 初出と初版の『新しき命』には「二頭の馬」の文末に次の文章が加えられていた。「内々心配したにも拘はらずそれからのきみの日は割合に平静に、何等の動揺もなく過ぎて行きました。これまでの通りによく働き、よく食べて。子供たちとも誠実に快活らしく笑つて遊びました。自分が死形見のつもりで送つた二頭の馬を相手に遊び戯るゝその子供たちと共に。」その後載せられた1925年4月22日刊行された『新しき命』の新版には以上の文章が削除されて出版されている。つまり初版では題目だけを「二頭の馬」から「小指」に改題し、その後の新版では結末の部分が変更されているのである。

のすっきりしない結末なのである。

そのような「小指」の物足りなさを弥生子も認識したために、一年も経たないうちに同じ主題でありながら、きみの心理状態と情緒に焦点をおいた「渦」を発表したのではないか。最初「二頭の小馬」であったタイトルを「小指」に改題したのも、次の作品である「渦」の深化されたきみの心理描写を念頭においたためであろう。つまり、「二頭の小馬」を改題した『新しき命』に載せる二ヶ月前に、再び女中を題材にした「渦」を発表したことも改題の重要な原因であると考えられる。これまでの考察でみてきたように、「渦」には「二頭の小馬」の続編でもあるような主人公と話題の設定において類似するところが多い。作家が前作である「二頭の小馬」を念頭において「渦」の創作にあたったのは明らかである。しかし、『新しき命』に両作品を収めることが決り、二つの作品における主題の統一性を与えることが求められたのではないだろうか。「二頭の小馬」より「小指」とした方が両作品の主題のつながりをはっきりさせると考えたのであろう。両作品の主題の統一性をタイトルに与え、きみの劣等意識の象徴である小指への執着をより浮き彫りにさせる必要性を認識したためであると考えられる。

次の第3節においては、現実における大正期の女中問題と弥生子の作品に見られた主婦としての姿を、大正期に急増した婦人雑誌の中の主婦像を通してその影響関係を探ってみよう。

3. 婦人雑誌に見られる大正期の新家庭と新中間層

3.1 女中と主家の関係における近代化

前節で考察してみたように、弥生子は大正期の作品活動において主に自分の家庭内から題材をとっており、特に女中を主人公とした作品にも力を注いでいた。では、弥生子はなぜその時期作品の主題として女中のことを描こうとしたのであろうか。この節では、作品の書かれた大正初期、女中という存在が果たす家庭と社会の中での役割と、その時期の女中と主家との関係の変化など時代的、社会的背景への考察を通して、弥生子の作品の意図を明らかにしたい。

奥田暁子によると⁹⁾、家事使用人として家内の仕事をする女性に「女中」という言葉をあててようになったのは明治の末ごろからである。この言葉の由来は江戸時代に將軍家の大奥で働いていた上女中、中女中、下女中などであり、明治期になって使われる「女中」はそのなかの下女中に該当する。しかし、江戸時代から連続してこの呼称が使われた訳ではなく、明治の末ごろまで女中の代わりに「下婢」あるいは「下女」の呼称が使われていた。上流階級ほど厳密なものではなかったが、中流階級でも上層の家庭においては、複数の女中を仕事に応じて使い分けていた。ただし、女中頭(女中取締)のいる上流階級とことなり、中流階級の家庭において女中を雇い入れ、それをしつけて使っていくのは主婦の役割。「女中の使い方」は主婦としての必須教養の一つでもあった。そのため、中流家庭の主婦を対象とした多数のマニュアル本が出版されている。

特に明治期以降一般化した一人女中¹⁰⁾はどのような性格のものであったのか。一人女中は、座敷方の仕事も台所方の仕事もこなさなければならない。女中の多くが台所まわりの雑用など下女中の仕事を担当したことから、明治半ばには、下女や下婢が女性家事使用人の代名詞となった。そして、とくに技能も教養も必要としない下女、下婢としての女中はしだいに、貧困家庭の口減らし的もしくは食い扶持稼ぎ的な性格を強めていく。明治半ば以降の家政書や女性訓、家事教科書などには「婢僕の使役」「婢僕の監督」「婢僕の待遇」など、家事使用人に関する記述が多い。

このような女中が近代化の中で日本の家庭において一般化した理由について、尾高煌之助は、驚くほど収入が多くもなくとりたてて豊かでもなさそうな人々の家庭で女中が使われる情景が文学作品でひんぱんに描写され、読者がそれを不思議とも思わずに受け取っていた点に注目し、それはとりもなおさず女中の利用がありふれた現象だったことを立証していると指摘している。¹¹⁾つまり、それだけ女中の供給が潤沢だったのであり、その給金も比較的安かったということである。これほどまでに女中の利用が一般的だったのは、結局のところ、産業化の時代に突入した当時の労働市場が、基本的に労働過剰の状態にあったためであるとする。もちろん時代は、新しい型の工業技術にマッチした労働者を求めて

9)奥田暁子(1995年)「女中の歴史」『女と男の時空—日本女性史再考』5巻、藤原書店、pp.102-130

10) 加藤常子の『女中使ひ方の巻』(実業—日本社、1917年)には、一人女中についての定義と注意点が次のように指摘されている。「新婚の若夫婦、小官吏又は中流以下の家庭に於て手不足の爲め止むを得ず一人二人の女中を置くと云ふのが、即ち此処に云ふ一人女中の事ですが、多勢の女中を置くのと違ひ、出て行かれると直ぐ其日から困るので、自然女中に向つても余り厳しい事は出来ません。従つて女中の方でも我儘勝ちになり、失礼な言葉使ひをしりする様になると云ふ訳ですから、之れ又充分に研究を要する。」

11) 尾高煌之助(1995)「二重構造」『日本経済史6』藤原書店、pp.98-105

いたから、外国から「借りてこられた」技術に適応可能な熟練労働者たちは不足がちであったが、他方、伝統的ないし非熟練の労働に対する需要は、第1次大戦期のような好況期を除けば伸び悩むことが少なくなく、後者の供給がだぶつけば、女中のなり手はもちろん増加する結果となると解釈するのである。

このように尾高は、女中の利用がありふれた現象であった理由を女中の供給が潤沢だったからという供給の面から論じているが、しかし供給が多いという問題以前に女中を求める需要の問題がもっと大きい原因として挙げられると思われる。家電製品が一般的に普及されている今とは違って、当時は女中なしでは家庭生活は機能しない。暖房は炭や炭団の火鉢か炬燵、水は井戸から汲み、かまどで御飯を炊き、七輪でおかずを煮炊きし、風呂は薪で沸かす生活だったし、箒とはたきと雑巾で掃除をし、たらいと洗濯板で洗濯をし、衣服の仕立てから障子貼り、繕い物や洗い張りなど沢山の仕事があったから、主婦一人では到底家事のすべてをこなすことはできなかった。だから、女中を廃止することなど到底考えられないことだった。

1920年の第1回国勢調査によれば、「女中〔正確には女性の家事使用人〕」の総数は約58万人で、産業別にみた女性有業者のうち農林水産業、工業、商業に次ぐ第4位を占めている。「職業婦人」という言葉が定着し女性の職域が広がった昭和の初めになっても、この傾向は変わらない。また、奥田によると、女中になる人たちの年齢の制限はなかったから15歳未満から50歳以上までの各年齢にわたっているが、圧倒的に多いのは16歳から25歳までの未婚女性であり、この傾向はいつの時代も変わらない。学歴は尋常小学校卒か高等小学校卒が最も多いが、年とともに教育程度は上昇の傾向にあり、高等女学校を卒業した女性が増加している。就職の理由は1910年時点ではまだ、嫁入り前の家事見習いや都会での通学希望が多かったが、1937年の調査では就職の目的は嫁入り支度(31.74%)、修養(28.20%)、家計扶助(24.50%)、自活のため(11.14%)、家族扶養(2.85%)となっており、約7割が経済的理由である。

女中になることをかつては女中奉公とも言ったように、彼女たちは、少なくとも明治の中ごろまでは、貧しいという理由だけで女中になったわけではない。江戸時代までは奉公は決して珍しいことではなかった。「それぞれが階級に応じて奉公に出るのが修行と考えられていた。奉公は礼儀作法や家事を見習うためであり、大名の大奥のご奉公は娘を持つ親の羨望であった」(論者注：内田蘆庵(1920)「女中問題の考察」『婦人公論』7月号、中央公論社)そのような奉公が姿を消した後も、女中になるのは結婚前の行儀見習いのため、あるいは結婚資金を自分で貯めるために上流の家庭で「奉公する」ためという意識が明治の中ごろま

で、地域によっては大正の初めまで残っていた。¹²⁾

このような意識の残っている間は、女中と雇用主との関係は近代的な雇用関係ではなく封建的主従関係であった。しかし、雇用する側にも雇用される側にもそれを封建的主従関係と見る意識はなかったようである。女中と主家との間には温情的な主従関係が存在していた。清水美智子は『女中イメージの家庭文化史』(世界思想社、2004)の中で、今のような教育機会のない江戸時代にあつて、お屋敷奉公は行儀作法などを学ぶ教育機関であり、奉公の経歴を持つ女性には、良い縁談が持ち込まれてきたりするなど、富裕な農家・商家の娘たちにとって、奉公は一生続けるものではなく、結婚までの一時期につとめる花嫁修業としての性格が強かったと、近代化以前の女中奉公の性格を説明している。つまり、女中という就業期間を経て、良縁を得て結婚し、子どもをもうけることこそが女性の幸せと考えられていたのである。武家屋敷への奉公が姿を消した近代以降も、女中になるのは結婚前の修業のためという意識は残った。

1898年に施行された明治民法では、それまで家の一員と認められていた奉公人を家族から除外し、法制度のうえでは、奉公人は契約にもとづく近代的な雇用へと切り換えられた。しかし、法律が新しくなったからといって、人びとの考え方がただちに変わるわけではない。奉公人を「準家族」と位置づけて、家族的に扱う意識や慣習は根強く残ったのである。雇主の家庭では、嫁入り前の娘を預かつて「仕込んでやる」という意識のもと、女中の生活全般にわたって事細かに干渉や指導を加えた。一方、女中として雇われる娘たちの側も、「奉公とはこんなもの」と受けとめ辛抱していたようである。¹³⁾

12) 1911年の『婦人之友』の「上方の女中」(第9巻第3号)には、地域別に微妙に違う女中奉公についての文章が載っているが、当時の女中奉公の一般的な様子が描かれている。「行儀見習ひといふ名の通り、高くない家の娘が良家の風を見習ふため、品位をつくるために出るのです。それともう一つは、貧しいために、家庭でいろいろのことを教へられない子供を、年のいかない中から主家に預けきりにして教育をしてもらふので、奥さまの何でもよくお出来になるお家をと択んで出すのです。矢張り口入屋にかゝるのは少く、出入りのものから伝手をもとめてまゐりますが、十二三から六七年も一軒の家に奉公して嫁入りの支度をしてもらつて出て行くなど、すべて何か奉公の報いを得て、長い生涯の誇りとする様子で、厳格な家庭でさへあれば、親たちも安心して任せて置きますから。」

13) 『夜明けの航跡—かながわ近代の女たち』(ドメス出版、1987年)には明治・大正期の女中たちの経験談を収集されており、当時の苦しい女中生活の様子が語られている。「…都会というところはとにかく生活が全部違って、家の造りからちがいますからね、びっくりしましよ。だけれども行儀見習いに上ったんだという気持ちがありますからね、なんでも教われればよいと思って。泣きたいほど苦しい思いもあったけど、じきに慣れましたね。下にはお台所をする男の人や女の人がいるんですよ。私は中働きで入ったから、着物がいるんです。農家の着物じゃ駄目でしょう、とりあえずは、持ってたいい着物を着て、給料で着物をこしらえようと思ってね。給料はその時分で二〇円くれました。はじめは家へ送って縫ってもらったけど、少したつと自分で縫う間ができて夜なべに一生懸命で縫いました。」(「女中をしながら短歌を学ぶ」)、「大正一三(一九二四)年、一七歳の時、小山(静岡県)の岩田

主家と女中の関係の特徴をより詳しくみてみよう。他家の奥深くに入って、その日常生活を支えるのであるから、女中は信用が肝心である。雇う側もそれなりに気を使って、人伝での噂や紹介状を頼りに、できるだけ適切な人を探す努力を払ったようである。そのせいもあって、女中の中には家族の一員同然の扱いをうけたり、幼児がいる家ではその人格形成に少なからぬ影響を与えた者もあった。女中たちの多くは年頃になると縁を求めて結婚したが、主家では、親切な家になると縁談の世話をしたり、嫁入道具や婚礼衣装を整えてやった。そんな家に奉公した女中は、結婚後も元の主家に出入りし、慶弔事などのさいは手伝いにつけつるなど、主家との関係は生涯にわたり続いたものであった。このような意識や風習が残っているかぎり、女中と主家との関係は、近代的な雇用関係ではなく封建的な主従関係である。しかし、雇う側のみならず雇われる側も、それを「封建的」と見る向きはあまりなかったようである。

特に、明治を代表する女子教育者の一人である下田歌子の『婦女家庭訓』(博文館、1898年)を見ると、当時の女中観がどのようなものであるかが分る。彼女はの中で女中を「多くは大抵、無知無職なる、下等社会に育ちたる者」と定義づけた後、主婦が女中に対して取るべき態度として、①恩と威をもって接する、②賞罰を厳しくする、③生徒に教えるように接する、④じゅうぶんに情けをかける、⑤蔑んだような態度をとらない、⑥必要以上に親しくならない、などの心得を守り、常に「仁怒博愛嚴肅公平」をもって接するべきだ、と説いている。このような指南書は、当時の典型的な女中観の一端を示すものである。女中は無知、無教養の存在であるため、だからこそ厳しく且つ温かく接することが必要であるとしている。これは下田のみならず当時の女子教育者の共通した見解で、この時代に書かれた家庭書、家事教育書はこうした女中観を前提に女中の使い方などを論じたものが多かった。

しかし、このような関係がすべての女中に当てはまったわけではない。若い世代の女性の意識は徐々に変化していた。1907年4月に出た『婦人世界』¹⁴⁾(実業之日本社)の「女中紹介

医者へ奉公に出たんですよ。一ヵ月のお給料は二円だったですね。もう一人、伊豆から来た人と一週間交替で、お勝手と上の仕事をやったよ。そこの家は子どもが多かったし、それにお医者さんは夜中でも起こされるのですよ。朝はもう四時に起きてね、沼津の学校へ行く人がいて五時の汽車に乗るだからよ。朝早くから夜遅くまで働くので大変だったね。それでも一八、九歳までいたね。」(「医師宅に奉公」)

14) 実業之日本社(後に版元は婦人世界社に移動)より発刊された日本初の婦人雑誌として人気を得た。特に家庭婦人を対象にその独立的な精神と社会活動の能力を培う、「実際の婦人の啓蒙に進取的役割を果たした。与謝野晶子ら女流文学者をはじめ秋声、白鳥らによる文芸欄も忠実に載せた。1905年創刊し1933年、第28巻5号を以て終刊した。

欄)には、求人側が女中に求める条件は身体強健、正直、温和、子ども好きなどであり、従来通り女中に奉公人であることを望んでいるのに対し、求職者は都市、それも東京で働くことを希望し、主家に対しても、裁縫学校や産婆学校に通わせて欲しい、余暇に裁縫や編み物、生け花を習いたい、などを条件として出している。純然たる奉公人意識は薄れ始めているのがわかる。しかし、奉公人意識が薄れ始めているとはいっても、まだこの時点では労働者意識は薄弱で、給料については「望まない」が半数近くを占め、給料を望む場合も小遣い程度や学校や技芸学校へ行けばいいし、給料をとるためなら女工や事務員になる道が開かれてきたからである。女中の意識にもっと明確な変化が現われるのは日本経済が発展しはじめる第1次大戦後である。このような意識の変化の要因としては、すでに多くの研究者によって語られてきているように、それまでは農業を除けば女工か女中になるしか女性の働く場がなかったのが、事務員や教師、店員、公務員など女性の職場が広がったことや、働く女性の心性に変化が現れるようになったことなどが考えられる。

3.2 社会問題化する女中払底と新中間層の登場

以上のような変化の中で当時の女中生活の実態がどのようなものであったのかを当時の新聞資料を通してみてみよう。1900年創刊された週刊『婦女新聞』には毎週のように女中に関する記事が載せられており、当時主婦の間で女中問題がどれほど大きい関心事であったかが窺える。1904年8月29日の『婦女新聞』には「下女の境遇」という社説が掲載されており次のその冒頭の一節である。

朝は最初に起き出でざるべからず、夜は最後に寝ねざるべからず。食物は愛犬愛猫にも劣り、無形の束縛は鉄鎖よりも厳に、人なき六畳の玄関は電気灯の光燦然たれども、二畳の女中部屋は豆ランプの微光までに消えんとす。起床とり就床まで殆ど手を休む暇なく、家によりては食事中にも幾度か起たざるべからず。客あれば第一に忙はしきは下女也、客去りて亦忙はしきは下女也。洵に彼等は、雇人の如くにして他の雇人の如き待遇なく、家族の如くにして家族の如き自由なし、争ふに力なく、訴ふるに所なく、ただ時に井戸端会議に不平を洩らすことあれども、畢竟これ無益の水論、却つて嘲笑の種となる。あゝ下女の境遇また憐むべからずや。

当時の女中たちの辛さと苦しみが的確に説明されており、奉公に出た娘達にとって何よりも辛かったのは、勤務時間の制限がないのに加えて、広くない家のなかで雇主とひざを

つきあわせ、朝から晩まで追い使われていることであったことが分る。

ところが、このような女中の厳しい状況の一方で主人側の不満もないわけではなかった。1909年12月8日の『婦女新聞』には「下女と奥様の苦情くらべ」という記事が載せられている。まず、女中から雇主である奥様への苦情をみると、①休日や休憩時間など少しも約束通りにしてくれない、②家族の人数などの条件が聞いていたのと違う、③「口に入るものであれば何でもよいのか」というくらいに食事が粗末、④むやみに人を追い使うことばかり考えている、⑤二言目には「のろいのろい」と言う、⑥女中を不正直と決めつけ少しも信用しない、という内容である。一方主婦の側からの苦情は、①見かけは気が利きそうだが、使ってみると役に立たない、②皿を壊したり食物を無駄にするなど不注意で仕方がない、③すぐに嘘をつき信用できない、④用事が多いときにかぎって外出するなど、肝心なとき頼みにならない、⑤面倒をみてやっているのに嬉しそうな顔をせず可愛げがない、といった苦情が寄せられていた。

そして、このような両者の関係の悪化を防ぐ必要性を認識したためであろうか。1904年5月1日付けの『婦女新聞』には高信狂醉の「女中論」の中で主婦側が改善すべき点などの論説が掲載される。その内容を簡単に整理すると、①労働時間を定める、②一定の休暇を定める、③呼び捨てにしない、④女中部屋を必ず与える、⑤女中と家族の食物を同じにする、⑥礼法一般や家政法の教育をする、などをあげている。裏返せば、十分な女中部屋も食事も与えられず、決まった休日もないまま、呼び捨てにされ、主人の都合で終日ドラダラとこき使われる。これが典型的な女中の姿だったといえよう。

家事習得や礼儀作法を学べることを期待して奉公に出る者が少なくなかったが、朝から晩まで追い使われるばかりだったり、雇主の側でも一人女中を置くような小家族の多くでは、主婦自ら家事、育児に忙しく、女中のしつけと教育には手が廻らなかったのが実情であった。そんな中で明治期以降の女中不足という問題はただ家庭の中の問題にとどまらず社会的な問題として浮上するのである。

日清戦争後の1896年、『女学雑誌』は「下女の払底」(第98号)という記事を掲載し、東京において女中が求人難となり、賃金が騰貴していることを次のように報じた。

何故かく下女の給金が高くなるかと言ふに、近年諸方に製造所勃興し、女工を要むるを多く、其の賃金も亦た割が善きゆえ、朝から晩まできまりなしに追ひ使わるる下女奉公よりは、時間のチャンと定まった製造所通ひの方が楽でもあり、また中には洋服を着たり、官立の製造所に通ひなどして、何となく出世したる心持もし、其の上、年がたてば段々賃金も上がる

故、何のみち之を楽しみにして自然、下女奉公を嫌ふやうになり、さては斯く下女の払底を来せし也。

『女学雑誌』ではだれよりもいち早く女中払底の問題を提起しているが、ここでは女中払底の現状が女工という新しい職業の広がりによって生じたと分析している。このような女中払底は大正期から昭和戦前期にかけて新聞や雑誌などで頻繁に取り上げられたテーマの一つであった。女中払底の現象は明治30年前後から見られており、その傾向は明治40年代から顕著になり始め、第1次世界大戦を境に加速したとみるのが一般的である。特に牛島千尋は「戦間期の東京における新中間層と『女中』—もう一つの郊外化」(『社会学評論』第52巻第2号、2001年)の中で、女中不足の問題は明治後期から新聞の家庭欄や婦人雑誌などで取り上げられ、主婦向けの指南書も出版され、婦人雑誌は女中問題の特集を組み、官公庁や団体によって調査が行なわれたことを指摘し、このことは、女中不足が都市の主婦にとっていかに重要な問題であったかを物語るものであると論じている。この時期はちょうど弥生子が女中ものを書き始めた時期であり、そのような女中払底という社会的にまで問題となっている女中払底という現実を作品の題材として逃すことはできなかったのであろう。

女中払底の原因については、先の女学雑誌の文章のように、明治半ば以降の殖産興業の進展により、これまで女中を供給してきた地域に産業が発達し、女性の職域が拡大したためであるとする見解が多い。特に女工という働き口が生まれ、その需要が高まるにつれて、他人の家に女中として住み込むよりも、工場に勤めて日給を取ったほうが気楽でいいと、女工になる者が多くなった。たとえ女中として住み込んだとしても修業という気持ちに乏しいから、少しでも給料の高いところやより待遇のよいところを選び、気に入らなければさっさと辞めて、より条件のよい家庭に移ろうとする。「桂庵」のなかには求人難に乗じ、周旋した奉公先の女中に甘い言葉をかけて次々と住み替えさせ、手数料を稼ぐ悪質な業者もあった。高等女学校など女子の教育機関が発達したことも、女中払底に影響している。ひと通りの礼儀作法や家事技術は、あえて女中に住み込まずとも学校へ通えば覚えられる。行儀見習や家事習得をおもな目的に女中となる者は減り、代わって、都会に出る方便や苦学のための手段として女中になる者が増えてくるのである。

奥田暁子も需要と供給の面から女中払底の原因をさぐっており、大阪市職業紹介所が1933年に過去10年間の女性求職者について調査した結果を引用している。女の職種が広がったことで女性求職者数が飛躍的に増加し、求職者の過剰は店員、飲食店雇人、事務員を筆頭に、家事使用人を除くすべての職種にわたっているが、家事使用人に関しては、

1932年を頂点として、求職者数は下降の一途をたどっていることを指摘している。そして、求職者の減少とは逆に求人は増加傾向にあるため、ますます女中不足が加速される結果となっているということである。大阪市の場合、女中の求人者に対する求職者の割合は1932年が84%、1933年は57%、1934年は45%であった。女中の希望者が激減したのは他の職業に比べて、給料が低い、労働時間が長いなど、労働条件が悪いのが一つの理由であろうが、食費、交通費、被服費その他の雑費を節約できることを考えると、実質的な賃金は工員と大差ない。それにもかかわらず、女中の求職者が減少したのは、「自分の自由になる時間がないことや他人の家に住み込んで主人の機嫌を伺いながら封建的身分関係に縛られることに嫌気がさしたから」であると分析する。¹⁵⁾つまり、女性の意識に変化が起ころしはじめたのである。同じ賃金なら工場や会社で働きたいと思うのは当然である。

一方、清水美智子は、明治末期に報知新聞の記者・磯村春子が東京市で取材したある「桂庵」の主人の「近頃は、何誰の御家庭でも、女中が払底で、といふ様なお話を伺ひますが、然し、手前どもの様な周旋屋の方から申しますれば、地方より上って来る女中は、ますます増加えておるとも、決して減っては居りません。唯、下女中、つまり炊事婦志願の女だけは、少なくなりました」という言葉を引用し、上京する女中志願の女性は減っていないのに、女中払底がおこるのは、女中紹介欄の広告からもうかがえるように、求職側の条件と求人側の条件との間にミスマッチが生じていたからにはほかならないと論じている。研究者によって女中払底の原因分析は少しずつ異なるが、総合してみると、明治期と大正期までは、女中を希望する人は少なくないが、働く側の認識の変化によって雇用主と雇用人の齟齬が女中不足を招く主な理由だったが、昭和期に入っての女中不足は女中の供給の数自体が減っていったことによるものであると説明できる。結果として、都会で女中払底が無視できない家庭問題として浮上してきたのは確かな事実なのである。

では、以上のような女中払底に対する社会の対応はどのような形でなされていたかについて簡単にみてみよう。まず、雑誌『婦人世界』は1910年、新たに女中専門の職業紹介欄を設けた。「雇ひたき方」「雇はれたき方」それぞれが匿名で広告を掲載するというもので、編集局には、求人・求職の申し込みが毎月百通以上も寄せられ、「到底狭い誌面では全部掲載できませんから、あまり望みの大きすぎるもの、注文の無理なもの、今までの経験上、決定しさに思はれぬもの、女中紹介以外にわたるものは総て没書します」という広告まで出たくらいの盛況ぶりであった。

15) 奥田暁子(1995)『女中の歴史』『女と男の時空—日本女性史再考』5巻、藤原書店、pp.101-130

女中が居着かない、よい女中が見つからないという状況に直面して、雇主である主婦の側も女中との関係を見直さざるをえなくなる。たとえば、雑誌『家庭之友』は1909年、「下女の使ひ方」という記事を掲載した。変わりつつある女中を、いったいどのように扱ったらよいのか。そんな主婦たちの思いを反映して、明治末から大正にかけて発行された女性雑誌には、女中の使い方に関する記事が非常に多い。女中側の意識の変化をふまえ、主婦の側でも、女中に自由な時間を与えたり、食事内容を家族と同様にするなど、待遇改善をはかる動きもみられた。しかし、こうしたやり方が必ずしもうまくいったわけではない。規律を甘くしたため、たび重なる夜更かしや外出により生活を乱す女中が増えたり、主婦を友達のように考えて礼儀をわきまえない女中が目立つようになるなど、新たな問題も発生したのである。

また、雑誌『婦人世界』は1909年の5号で、「女中欄」をスタートさせた。新設にあたり同誌には「家庭における主人と女中との新関係」という文章を掲載している。当時、主婦にとって女中の使い方がいかに大きな関心事であったかを示すものの一つである。「女中欄」の特徴は、読者参加型の企画を積極的に取り入れた点にある。「十年以上勤続せる女中の実例」のほかに、「感服したる主人の実例」「感心なる女中の実例」を懸賞募集し、いずれも3百通以上の事例が寄せられるなど、好評を博したものであった。これら実例記事から浮かび上がってくるのは、思いやりある態度で接する主婦と、それに対して感謝の気持ちを抱く女中の、温情的な主従関係である。裏返せば、誌面で繰り返して取り上げなければならないほど、当時の主婦と女中との関係は変化しつつあったといえよう。

では、女中不足の一つの原因である需要者側の問題に再び目を向けてみよう。女中の使い方などが明治末から大正期にかけてポピュラーなテーマの一つだった背景には、都市部を中心として、官吏、教員、会社員、職業軍人などいわゆる新中間階級が増大し、新たに女中を雇う階層に加わったことが挙げられる。

明治の中ごろまでの日本ははっきりした階級社会であったから、女中の雇用主の職業も県知事、元旗本、男爵、藩の侍医などいわゆる社会の上流階層の人々であった。しかし、資本主義の発展にともなう新中間層の誕生で、女中を雇用する層も大きく拡大する。明治末の時点では、雇用主の職業は官吏や医師、軍人、会社員が増えている。濱名篤が「明治末期から昭和初期における「女中」の変容」(『社会科学研究』第49巻第6号、1998年)において、雑誌『婦人世界』各年版「女中紹介欄」より集計作成した資料をみると、求人側の職業を1910年の求人側の職業構成をみると、銀行会社員23.9%、医師15.4%、官公吏14.5%などが上位を占め、教員、軍人を加えると7割が、俗に「新しい中産階級」と呼ばれる社会層である。こ

れには『婦人世界』という婦人雑誌購読層が母集団になっていることが多き影響しているとも考えられる。しかし、同欄の求人側の女中雇用状況をみると、66%が「雇用していない」(新規に雇用あるいは後任雇用)ことや、雇用しても一人程度(17%)であることを考え合わせると、明治末期から銀行会社員や官公吏など増加しつつあった新しいタイプの俸給生活者(ホワイトカラー)層が、女中雇用を進めようとしていたことが十分推測できる。この事を裏付けるように、官公吏、銀行会社員、教員など新しい俸給生活者の女中求人層の8-9割が「(現在女中を)雇用していない」層となっている。つまり、おそらく彼らは新たな女中雇用層となった人々であったのであろう。

日本資本主義の発達は明治末頃から新中間階級といわれる俸給生活者と自由業の階層を生み出した。これらの人びとは非物質生産に雇用され、一定の学歴と知識を持ち、その所得は労働者の上に位置する人びとであった。新中間階級のなかで多数を占めたのは官吏、軍人、教育関係者であるが、明治末年から大正にかけてとくに増加の激しかったのは官吏である。新中間階級の人数についてはきちんとした統計資料がないため正確な数字は分からないが、所得階層では年収5百-5千円、学歴では中等教育以上(中学校、高等女学校、実業学校、師範学校、高等専門学校、大学など)の教育を受けた階層がこれに該当するとされる。16)新中間階級は明治末年から増大しはじめ、大正半ばには全国民の7-8%に達したと推定されている。この新中間階級が新たに女中の求人階層に加わることになったため、女中不足が加速されることになったのである。特に、明治から大正にかけて官吏の数が急増したことが、女中の需給バランスを崩すことになった。

また清水美智子は、明治末期の雑誌『婦人之友』『家政問答』欄に寄せられた読者の投書を、夫の職業、世帯構成、収入などについて整理をしており、当時の新中間階級の形態を知るにいい資料となっている。採用した20世帯の平均世帯人員は5.1人。「夫婦と子ども」もしくは「夫婦と子どもプラス女中」という世帯が一三世帯を占め、夫婦の親や兄弟が同居するのは4世帯にすぎない。8割の世帯に子どもがおり、平均子ども数は2.05人。女中を置いているのは20世帯中13世帯で、女中の数は9世帯が1人、4世帯が2人であった。夫の職業に目を転じると、「官吏」「会社員」が各5世帯。「軍人」「教員」が各3世帯。世帯あたりの月収は、30円からおおよそ170円までばらつきが大きいですが、平均すると78.25円。当時としては中流の生活水準といえる。17)

16) 奥田暁子、前掲書参照、pp.45-59

17) 清水美智子(2004)『女中イメージの家庭文化史』世界思想社、pp.3-39

4. 終りに

以上の資料で示されるように、新中間階級の家庭の大半は、女中を置くといってもせいぜい一、二人の、何でもやる雑働きの女中を雇うことができたにすぎない。女中を雇ったからといって、家事雑用のすべてがこなせるわけではなく、むしろ主婦ひとりではこなされないからこそ女中を雇ったのである。女中に出て行かれると直ちに影響が出てくるから、女中の機嫌を損ねまいとして、主婦は厳しい態度で臨むこともできなかった。そこで新たに、新中間階級の主婦を対象とした「女中の使い方」マニュアルが求められるようになったのである。

以上のように、女中と雇用主との関係における変化が激しかったのは明治末から大正期にかけての時期であり、この時期は弥生子が女中ものを集中的に書いた時期と一致する。弥生子の作品の中で描かれる女中と主人の姿は、助川や坂本が指摘していたように、あまりエゴイスティックであるとか、他人の痛みが無神経であるといえるところがあるかもしれない。しかし、現実的な観点からみると、両者の関係を温情的なものとして美化することなく、実生活のなかで十分ありえる家庭主婦としてのリアルな生活感情を率直に描いていることに注目すべきであり、またそれがいつも理知的態度を失うまいとする弥生子の特徴なのである。今まで使っていた女中が代わることによって生じる不便を語っていながら、きみに深い愛情をも表すことを忘れない二重的な主婦の曾代子の姿から、当時の女中問題の一断面を見ることが出来る。

【参考文献】

- 内田蘆庵(1920)「女中問題の考察」『婦人公論』, pp.23-24
 尾高煌之助(1995)「二重構造」『日本経済史6』藤原書店, pp.98-105
 加藤常子(1917)『女中使ひ方の巻』実業之日本社, pp.3-20
 神奈川県立婦人総合センター(1987)『夜明けの航跡—かながわ近代の女たち』ドメス出版, pp.30-55
 牛島千尋(2001)「戦間期の東京における新中間層と『女中』—もう一つの郊外化」『社会学評論』第五十二卷 第二号, pp.67-83
 国立社会保障・人口問題研究所編(2006)『人口の動向』, pp.45-50
 坂本育雄(1969)「野上弥生子ノート」『日本文学』十八(五), pp.38-52
 清水美智子(2004)『女中イメージの家庭文化史』世界思想社, pp.3-39
 助川徳是(1976)「野上弥生子の初期作品」『名古屋大学教養部人文社会科学紀要』二十, pp.21-35
 助川徳是(1984)『野上弥生子と大正期の教養派』桜楓社, pp.15-47
 下田歌子(1898)『婦女家庭訓』博文館, pp.15-17

- 瀬沼茂樹(1965)『日本現代文学全集』六十三、講談社, pp.78-90
 瀬沼茂樹(1984)『野上弥生子の世界』岩波書店, pp.29-38
 高信狂醉(1905)「女中論」『婦女新聞』一九〇五年五月一日, pp.39-40
 谷川徹三(1954)「解説」『昭和文学全集』三十二、角川書店, pp.102-104
 谷川徹三(1955)「野上弥生子」『現代日本文学全集』二十八、筑摩書房, pp.69-90
 内閣統計局編(1931)『大正九年国勢調査職業名鑑』 pp.33-34
 野上弥生子(1980)『野上弥生子全集』第一卷、岩波書店, pp.121-135
 野上弥生子(1980)『野上弥生子全集』第二卷、岩波書店, pp.3-140
 濱名篤(1998)「明治末期から昭和初期における「女中」の変容」『社会科学研究』第四十九卷第六号, pp.15-65
 「上方の女中」(1911)『婦人之友』第九卷 第三号, pp.57-60
 「下女の境遇」(1904.8.29.)『婦女新聞』 pp.8-9
 「下女の使ひ方」(1909.4.)『家庭之友』 pp.25-29
 「下女と奥様の苦情くらべ」(1090.12.8.)『婦女新聞』 pp.13-14
 「下女の払底」(1896)『女学雑誌』第九十八号, pp.23-24
 「女中紹介欄」(1907.4.)『婦人世界』実業之日本社, pp.45-46
 「女中欄」(1909.5.)『婦人世界』実業之日本社, pp.39-40

논문투고일 : 2013년 12월 10일
 심사개시일 : 2013년 12월 20일
 1차 수정일 : 2114년 01월 09일
 2차 수정일 : 2014년 01월 15일
 게재확정일 : 2014년 01월 20일

 <要旨>

野上彌生子が描く大正期の新家庭と「主婦」

- 女中物語「小指」と「渦」を中心として -

野上彌生子の明治期から大正期にかけて書かれた短篇の作品のうち、自分の使っていた女中を題材にした作品がいくつかある。「お由」(明治四十五年一月一日)と、「小指」(大正四年十月一日)、「渦」(大正五年九月一日)がそれである。一人の主婦として、母として感じざるを得ない理性と感情の対立、現実と理想の衝突、ややもするとエゴイスティックに傾いてしまう人間の本性への鋭い観察と分析が行なわれており、彌生子の理知的な性情がうまく表現されていて興味深い。この作品に対する評価は思春期の少女への同情がベースとなって彌生子特有の緻密な観察力への肯定的な評価と、女主人の女中に対する態度における無神経さ、前近代的な姿勢、特権的な立場の表れなどへの批判的な評価である。しかし、そのような批判はその時代、大正期という同時代的な状況や時代背景を考慮しない、やや不注意な分析から出されたものである。また、作品の表面に連なっている言葉だけに集中したために、そこに秘められている彌生子の特徴的な描き方と真の意図を見逃している。本論文を通して「お由」から「小指」、「渦」に至るまで、主人公である女中きみと女主人の曾代子という人物設定の同一性と物語の連続性を明らかにして、彌生子が目指した作品の意図をはっきりしたい。さらに彌生子が大正初期という時期に女中を題材とした作品を連続して発表した背景として<新中間層>の登場という当時の時代的な状況を見逃してはいけない。当時の家庭生活をうかがうことができる『婦人公論』『婦人世界』などの雑誌と『婦女新聞』などの新聞資料を用いて、女中という存在が果たす家庭と社会の中での役割と、女中と主家との関係の変遷などをたどり、彌生子の女中物語の意図を考え直し、その位置づけを試みたい。

New Family and Mistress in Taisho Era Described by Nogami Yaeko

- Focused on Maid Stories, 「Koyubi」 and 「uzu」 -

Among works Nogami Yaeko had published from Meiji to Taisho era, there are several ones of maids employed by her, which are 「Oyoshi」, 「Koyubi」, 「Uzu」. The evaluations of the works are divided into positive and critical one respectively: i) Yaeko's uniquely elaborate observation based on sympathy for adolescent girls is excellent; ii) the mistress's attitudes to maids are indifferent and premodern, and there privileges are expressed without any filtration. However, such a critical evaluation is derived from a careless decision based on limited observations of the work and unnoticed background and situation of the Taisho era. And it also seems to miss the Yaeko's characteristic descriptions and therefore a true intention hidden in the works. This thesis attempts to consider the intentions of the works by revealing an identity of character creations including the heroine, a maid Kimi and the mistress, Soyoko, and continuousness of a story. Moreover, as a background from which Yaeko successively presented the works using the maid as a material at an early Taisho, the situation of the time in which a new middle class appeared should not be ignored. A meaning of the Yaeko's <Maid Story> would be re-interpreted and its position re-established by considering maids' roles in households and societies as well as relationship changes between maids and mistress, on the basis of newspapers including the 「Hujosinbun」, etc and magazine materials such as 「Hujinkoron」 and so on through which family lives can be briefly observed at that time.